

山のトイレデーに参加して

鈴木和夫 ((社)日本山岳会々員：名寄市在住)

(はじめに)

私が帯広に住み山に行っていた昭和30年代後半から40年代は、主に裏大雪や日高、夕張山系をフィールドとして時期を問わず歩いていましたが、当時は時折行き交う登山者も今言われているいわゆる中高年登山者には殆ど出会うこともなく、正直「キジ撃ち」については誰もが問題意識を持っておらず、ごく普通にテントサイト附近で一定のルールの基に行われており、またその痕跡も自然の浄化作用で翌年は跡形もなく消え去っていたように思います。

(問題意識)

しかし、帯広当時数回登ったことのあるトムラウシ山に職場の仲間と平成7年に20年ぶりに行った時、南沼のキャンプ地の拡大が一目で分かり、更にいたる所に触覚を伸ばしたようなトイレ道とティッシュの花が溶けずに残っていて見るも無惨な姿をさらしており、翌年の7月に利尻山にこれまた30年ぶり位に訪れた時の避難小屋でも小屋の後ろが新しいティッシュの花畑状態でした。

このような現状を見て、このキャンプ地の裸地の拡大やティッシュの花畑を作った原因者は、我々登山者であり、その一人一人が問題意識を持ち行動することの必要性を痛感したのであります。それで、平成10年に携帯トイレを見つけ直ぐ購入し、その後美瑛岳の避難小屋やニペソツの土場その他の場所でも継続的に使ってみて特にこれといった違和感も無いことから今までいつも持ち歩いているところです。

(北海道山のトイレを考えるフォーラム)

私がこの活動に関わるようになったキッカケは、平成13年の「第2回山のトイレフォーラム」を聞きに行ったのが始まりで、私はこの時フロアからオーバーユースによる現状の改善を早急に進めなければとの思いで、(1)道や地元自治体、地元山岳会がそれぞれの地域において単独組織で問題を解決するには時間もかかるだろうし困難だと思う。現状はそんなに待てないのではないのか？(2)そこで道や地元自治体・観光業界、地元山岳会や道内の登山愛好家などがそれぞれ持っているパワーを出し合いそれを上手く結合出来ないものだろうか？(3)その例としてキャンプ指定地に携帯トイレのブースと携帯トイレのストッカーを登山者の多い時期に設置する。その役割分担は地元自治体などがトイレブースと携帯トイレ等を用意し、これを登山愛好家がボランティアで融雪後に担ぎ上げ、シーズン中のブースのメンテナンスや携帯トイレの補充は、地元山岳会が行い、降雪前にまた登山愛好家がトイレブースなどを担ぎ降ろす。各登山者はテントサイトで使った携帯トイレを責任を持って担ぎ降ろす。(4)道は恒久的な山岳トイレの研究開発の支援とトイレマナーの啓発を行う。(5)最後にフォーラム参加者に向けて自分の携帯トイレの使用感や失敗談を披露した様に思います。

(私の山のトイレデー)

私の山のトイレ活動は、HYML（北海道山のマリングリスト）の一員として平成13年の「全道一斉山のトイレデー」に参加したのが最初で、この時は、前日の十勝岳下山後楽古山荘を早発ちし、アポイ岳登山口でK井さんと私が居残りしパンフレット配布、残りの数名は「山のトイレ」の幟を持って頂上まで啓発活動とティッシュの回収に出発しました。この間K井さんは地元山岳会の10数名の方々に山トイレの現状と活動の必要性について熱弁を振るい、その後上に行った者から5合目の休憩小屋に沢山のゴミがあるからザックを空にして登ってくるように指示があり、早速小屋まで行くと何と大きな針金製のモッコやゴミがあり、それを二人のザックに収めて下山してくるメンバーを待っていると真っ青な幟が下山して来るメンバーの位置を教えてくださいました。

このトイレデーに参加して得たものは、何も気負って参加するのではなく、自分の出来る範囲で山を楽しみながら行動すれば良いことが十分に実感出来たことであります。

その翌年からは、山のトイレ問題の現状を考えた時に全道一斉山トイレデーの一日だけではなく、自分が山に行くたびに出来るだけ幟を持って歩き、登山者に問題意識を持って貰うことも必要でないかと、勝手に極力登山者の多い山に行くときには配布用のパンフレットなどと共に持って歩くようにしています。この幟は有効で行き交う登山者や休憩時間などに「何の活動ですか？」とか「私も携帯トイレを持っていますよ」と声をかけてくれるのでその都度パンフレットを配りながら「①登山口で用を足してから登って、②山の中では使用済みの紙は持ち帰って、③出来るだけ山で用を足すときは携帯トイレを使って」とお願いする機会が多くなり、この様な皆さんの反応が私自身の励みにもなっております。

(終わりに)

北海道山のトイレを考える会の活動効果も、道がバイオトイレを主要地域に試験的とはいいいながら設置したことや、キャンプ指定地に携帯トイレブースを置き、無料で携帯トイレの配布を開始したこと。更には地元自治体でも登山口に簡易トイレを設置するなど各地でその動きが出始めたことは当面の問題解決につながりこれまでの会の活動実績は十分評価に値すると思っています。

しかし、私のこの3年間の活動を振り返ったとき、この山のトイレ問題はまだまだ山に入る人達に充分認識されていないのではないかと思います。その理由は昨年も一回の山行で前年に回収したにもかかわらず10箇所以上でティッシュを回収したり、山岳ガイドの付いたツアー登山でも携帯トイレを常備していないパーティが未だ現実に登山しているからです。

この山のトイレ問題は我々登山者一人一人が自覚と責任を持った行動が出来れば直ぐにも解決できる事ですが、現実には残念ながらその域に達しておらず、行政の普及啓発にも限界があり、今暫くこの会の地道な活動が必要であると強く感じることから、今後とも積極的に行動する「北海道山のトイレを考える会」であって貰いたいと期待しているところです。